

---

# 伝えたいコトバ

和泉 優衣

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

伝えたいコトバ

### 【Nコード】

N4126L

### 【作者名】

和泉 優衣

### 【あらすじ】

迷宮無しの名探偵と謳われている東の名探偵、工藤新一。

幼馴染の毛利蘭に想いを伝えたいのになかなかタイミングがつかめず……。

## 1 タイミング（前書き）

間違って消してしまったので再投稿（＞＜）  
前と比べて若干修正しますが、流れは同じです。  
読んで下さるとうれしいです。

## 1 タイミング

（あーっ、タイミングがつかめねえ・・・）

ここに苦悩するひとりの少年がいた。

関わった事件はすべて解決、

その推理力は並ならないと有名な

迷宮無しの名探偵と謳われている東の名探偵。

1ヶ月前までは小学1年生の『江戸川コナン』として生活することを余儀なくされていたが

組織を倒し元の姿に戻ることができた。

山ほどの追試と課題をその天才的な頭脳で難なくクリアし、

晴れて高校3年生となった。

その名を工藤新一。

世界的に有名な父と、

かつては日本内でその名を知らないものはいないといわれるほどに人気だったが結婚を期に引退した母を持つ、

親子そろっての有名人なこの少年。

一見非の打ち所などないように見えるのだが。

（早いと言わねーと・・・。）

幼馴染で同級生の毛利蘭のこととなるとその完璧な姿はどこかへ消えてしまうようだ。

そもそも新一がここ1ヶ月ずっと悩み続けているのは

その蘭への告白について、である。

彼女の気持ちは知っている。

自分の気持ちなどもっとよくわかっている。

彼女以外など考えられないし、

彼女が自分以外の男と付き合うことになどなったら狂うだろうことも容易に想像できる。

本当は元の姿に戻ったときすぐ蘭に気持ちを伝えようと思っていたのだ。

けれど。

“ 高校生探偵復帰 ”

という話題で世間は盛り上がっていた。

マスコミにインタビューはされるし、

警察に事件だ、と引っ張り出され、

長いこと欠席していた学校の課題、追試に追われ。

告白のタイミングがつかめないまま、1ヶ月が過ぎてしまったのだ。

一度タイミングを外すとなかなか次が見つからないのが告白というものの恐ろしさだと痛感してしまった。

進級して次の5月4日でいよいよ18歳。

法的に結婚さえ認められる年齢となってしまう。

そう。

ここでなんとか両想いとなって恋人とならなくては。

新一の理想は両親と同じ20歳での結婚である。

『コナン』としての日々が「普通」となってしまった新一にとって、

蘭と離れた家に別れ別れで暮らすという毎日は辛いのだ。

だからとにかく結婚して蘭と共に暮らしたかった。

ただでさえ蘭には非常に難関な両親がいるのだ。

20歳で結婚を許してもらうにはとにかく早く彼女と将来を語り合える関係にならなくてはいけない。

そんなこんなで悩み続ける新一の姿は、きっと危なかったに違いない。

有名な彼なのに人通りの多い大通り沿いの道があるいても関わらず、

誰にも声をかけられなかったのが良い証拠だった。

## 1 タイミング（後書き）

感想・メッセージなど、

よろしく願いします＼（＾Ｏ＾）／

5 / 15



## 2 新一 Side . .

「あーっ、どうすりゃいいんだ・・・？」

「どうしたの？新一」

「ら、蘭！！？」

いま悩みに悩んでいる告白をしたい相手、蘭の声が聴こえてきた。

驚いて振り返った新一は、すぐ後ろに立つ幼馴染の少女の姿を認めた。

「そんなところで何やってるのよ。」

蘭は不思議そうに新一を見つめてくる。

新一の心臓が大きく鼓動する。

（蘭はいつみてもかわいいな・・・畜生・・・）

空手の都大会で優勝などという武勇を持つ幼馴染だが、

怒ってさえいなければ本当にかわいいのだ。

いや、新一にとっては怒っているときの彼女ですらかわいく思える。

ただし怒っている彼女は手が出てくるので恐ろしさも隠せないのだ

が。

「さ、先に帰ったんじゃないのか？」

「ちょっと用事があったからね。それで帰ろうとしてたら新一が立ち止まってぶつぶつ何か悩んでるんだもの。何事かと思うじゃない。」

「で、どうしたの？」

と問いかけてくる幼馴染に、新一は心の中で叫んでいた。

（バーロオ！おめーに告白するタイミングがつかめなくて悩んでいたなんて言えるわけねーだろっ・・・）

なんとかこの場をこまかそうと考えていた新一の目に、ふと不快な光景が飛び込んできた。

通りざまに彼女を振り向く男たち。

遠巻きに彼女を見つめる男たち。

蘭はかわいい。

一般的には美人の類だ。

そんな彼女に見惚れない男などそうそういない。

。

新一の中で何かが切れた。

見るんじゃねー、寄るんじゃねー、蘭は俺のもんだっ！！

「蘭！！」

「な、なに？どうしたの、新一・・・」

突然声を張り上げた新一に蘭はびっくりした。

「俺、蘭が好きだ！蘭のことをこの地球上の誰よりも愛してる！」

## 2 新Side・・・(後書き)

久しぶりです

感想お願いします

5 / 2 4

### 3 返事は・・・

「え・・・。」

沈黙したあと蘭は真っ赤になった。

自分の気持ちが新一に知られていることはなんとなくわかっていた。

この1ヶ月、新一からの言葉を待っていたのも事実だ。

けれど。

「な、なに言ってるのよ！こんなところでーっ！」

まさかこんな公共の面前で言われるとは思っていなかった。

新一相手にロマンチックな告白を期待していたわけではなかったが・  
・・・。

まさかこんなところで！

「場所なんて関係ねーんだよ！俺の本当の気持ちだからな！」

・・・新一だつてまさかこんなところでこんな風に告白するとは思つてもみなかった。

父のようにレストランで、とか考えていたのに。

けれどいったん口にしてしまえばそのあとはもう悩むことはなかった。

変なタイミングであつたことは間違いないが、これ以上のタイミングも

ないのではないかと思う。

・・・彼女は自分のものと公共の場で宣言できる。

「・・・返事はくれねーのか？」

こんなところで言えるわけじゃないじゃない！

・・・と叫ばうと口を開いた蘭だったが、

新一の顔を見たらそれは声にはできなかった。

真剣な、本当に真剣な、事件を推理するときよりもずっと真剣な顔。

蘭がずっと自分に向けて欲しかったその表情。

「……蘭はここがどこなのかということを忘れて口を開いた。

「……ば、ばか。わかってるくせに……。」

「蘭の口から直接聞かせて欲しいんだ」

この顔だ。

事件に嫉妬してしまうほどにずっと欲しかった。

この言葉も。

「……好き。私は新一のことが好き！」

真っ赤になってそう叫んだ瞬間、蘭は新一に抱き寄せられていた。

「サンキュー、蘭……。」

互いに互いの言葉が嬉しくて。

抱きしめた、抱きしめられた温もりが幸せで。

ふたりはそのまましばらく抱き合っていた……。

それからしばらくの間、

当然新一と蘭はあの場に居合わせたクラスメイト達に冷やかされ、

あのときのことを思っ  
て恥ずかしくなったりした。

両想いになったにも関わらず  
恥ずかしさのせい  
かあまり2人きりになることはなかった。

そして何故か、

新一が蘭に想いを告げた大通りでは、男女問わず告白するものが続出した……。



### 3 返事は・・・（後書き）

更新忘れてました（；；；）

『遺されたモノ』の更新も遅くなりそうです・・・。

ごめんなさい、。

8 / 26

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4126/>

---

伝えたいコトバ

2010年10月10日16時30分発行